

課題名	1 イチゴの低温処理育苗による新促成作型の開発と安定多収技術の確立	分類	①
	(1)イチゴの親苗冷蔵によるランナー発生促進法		
試験研究年次	63～1年(完了)		
I 目的 親苗の冷蔵処理がランナー発生促進に及ぼす影響を明らかにして、夏期低温処理栽培用の苗を早期に確保する技術を確立する。			
II 試験方法			
1 供試品種名 とよのか			
2 試験区の構成			
(1) 試験 - 1 定植時期と冷蔵期間 (63年)			
	定植時期	冷蔵期間	冷蔵処理時期
	63年12月15日	0 (無処理)	-
		1カ月間	11月15日～12月15日
		2カ月間	10月15日～ "
	1年1月15日	1カ月間	12月15日～1月15日
		2カ月間	11月15日～ "
		3カ月間	10月15日～ "
(2) 試験 - 2 冷蔵処理とトンネル被覆 (1年)			
	冷蔵処理	有り (1カ月間: 11月7日～12月7日)	
		無し	
	トンネル被覆	有り (4カ月間: 1月15日～4月15日、小型ビニルトンネル密閉)	
		無し	
3	冷蔵処理方法	ポット苗の状態での0℃の冷蔵庫で所定期間保存	
4	試験規模	1区20～50株	
5	耕種概要		
	(1) 親苗養成法	ポット育苗した苗を植え付け、または冷蔵処理開始時期まで養成	
	(2) 栽植様式	畝幅200cm、株間30cm、1条植え	
	(3) 栽培様式	黒色ポリフィルムによるマルチング栽培	
	(4) 施肥量 (基肥)	10a当たり三要素とも10kg	
III 主要成果の概要			
冷蔵処理した親苗を利用することによって、従来の方法よりランナー発生促進効果の高い技術を確立した。この技術を利用し、4月下旬までにランナーを1株当たり7～10本発生させ、5月下旬の採苗数を1株当たり20株確保することによって、親苗の植え付け株数を従来の半分程度に減らすことが可能となる。			
1 親苗を0℃の冷蔵庫に1カ月間貯蔵した後、親株床に植え付け黒色ポリフィルムマルチングを行うことによって早期にランナーを安定確保できる。			
2 トンネルやベタ掛け等を利用した保温処理は、ランナー発生促進効果をさらに高めることができる。			
3 年内の親苗植え付けによって、ランナーの発生は安定する。			
4 冷蔵処理に要するスペースは、10a当たり約20コンテナと小さくて済むので、各生産者の保有する個人予冷库を利用できる。			

IV 主要成果の具体的データ

第1表 定植時期及び冷蔵期間とランナー発生状況(63年)

定植時期	冷蔵期間	3/1	3/15	3/30	4/14	5/1
		本	本	本	本	本
12/15	0(無処理)	0	1.1	2.6	6.1	11.8
	1カ月	0	3.5	5.2	8.4	11.4
	2カ月	0	2.0	3.6	6.3	11.7
1/15	1カ月	0	1.0	2.2	6.4	12.1
	2カ月	0	1.0	1.4	3.6	8.1
	3カ月	0	0.6	1.4	4.0	7.0

注) 表中の数字は親苗1株当たりのランナー発生数

第2表 定植時期及び冷蔵期間と親苗の生育状況(63年)

定植時期	冷蔵期間	出葉数	草高	新生第3葉	
				葉柄長	葉身長
		枚	cm	cm	cm
12/15	0(無処理)	11.0	21.7	14.1	10.2
	1カ月	14.0	22.2	15.6	10.1
	2カ月	6.5	20.9	15.8	10.1
1/15	1カ月	11.0	18.8	15.5	9.8
	2カ月	8.0	17.3	14.2	9.8
	3カ月	6.5	18.0	13.6	9.7

注) 生育調査日 4月14日

第3表 ビニルトンネル被覆処理とランナー発生状況(1年)

被覆	冷蔵	3/3	3/15	4/2	4/17	5/1
		本	本	本	本	本
有り	有り	3.0	4.2	6.4	9.2	12.0
	無し	0.5	1.6	3.5	7.6	10.7
無し	有り	0.2	0.9	2.5	4.2	5.6
	無し	0.0	0.9	1.3	3.6	5.8

注) 表中の数字は親苗1株当たりのランナー発生数

V 成果の評価と取扱上の留意点

処理中の冷蔵庫の温度は0℃～-1℃を維持するとともに、適宜灌水等により乾燥による茎葉のしおれを予防する。

VI 今後の研究上の問題点

冷蔵親苗の利用による計画的な周年苗生産技術の確立

VII 資料名

1～2年度 福岡県農業総合試験場園芸研究所 野菜試験成績書